

ういろいろ売りの口上

親方と申すは、御立合の中に御存知のお方もござりましようが、お江戸を立て二十里上方、相州小田原、一色町をお過ぎなされて、青物町を登りへお出でなさるれば、欄干橋、虎屋藤右衛門、ただいま剃髪いたして円齋と名のりまする。

元朝より大晦日まで、お手に入れまする此の薬は、昔、ちんの国の唐人、外郎という人、わが朝へ来たり、帝へ参内の折から、この薬を深く籠め置き、用ゆる時は一粒づつ、冠のすき間より取出す。

依つてその名を、帝より「頂透香」と賜わる。

すなわち文字には、「いただき、すく、におい」と書いて「とうちんこう」と申す。

只今は此の薬、殊の外世に弘まり、ほうぼうに似看板を出し、イヤ、小田原の、灰俵の、さん俵の、炭俵のと、色々に申せども、平仮名を似つて「ういろいろ」と記せしは親方円齋ばかり、もしやお立合いの内、熱海か、塔の沢へ湯治にお出なさるか、又は、伊勢御参宮の折からは、必ず門ちがいなされますな。お登りならば右の方、おくだりならば左側、八方が八つ棟、おもてが三つ棟、玉堂造り、破風には菊に桐のとうの御紋を「赦免あつて、系図正しき薬でござる。

イヤ最前より家名の自慢ばかり申しても、「ご存知ない方には、正身の胡椒の丸呑、白河夜船、さらば一粒たぐかけて、その気味合

先づ此の薬を、かように一粒舌の上へのせまして、腹内へ納めま
ると、イヤどうも言えぬは、胃、心、肺、肝がすこやかに成つて、薫風
喉より来り、口中微涼を生ずるが如し、魚鳥、きのこ、
麵類の喰合せ、その外、万病速効あること神の如し。

さて、この薬、第一の奇妙には、舌のまわることが、錢独楽がはだしで逃
る。

ひよつと舌がまわり出すと、矢も楯もたたらぬじや。

そりやそりやそらそりや、まわってきたは、廻ってくるは、アワヤ喉、サタラ
ナ舌に、カ牙サ歯音、ハマの二つは唇の軽重、開合さわやかに、
アカサタナハマヤラワオコソトノホモヨロオ、一つへぎへぎに、へぎほしはじかみ、
盆まめ、盆米、盆ごぼう、摘蓼、つみ豆、つみ山椒、書写山の
社僧正、粉米のなまがみ、粉米のなまがみ、こん粉米のこなまがみ、儒子、
緋儒子、儒子、儒珍、親も嘉兵衛、子も嘉兵衛、親かへい子かへい、子かへ
い親かへい、ふる栗の木の古切口、雨がっぱか、番合羽か、貴様のきや
はんも皮脚絆、我等がきやはんも皮脚絆、しつかわ袴のしつぽころびを、
みはり三針はりながにちよと縫うて、ぬうてちよとぶんだせ、かはら撫子、
野石竹、のら如来、のら如来、三のら如来に六のら如来、一寸先のお
小仏に、おけつまづきやるな、細溝にどじよによろり、京の生鱈、
奈良なま学鯉、ちよと四五貫目、お茶立ちよ、茶立ちよ、ちやつと立ちよ茶
立ちよ、青竹茶煎で、お茶ちやと立ちちや。

来るは来るは、何が来る。

高野の山のおこけら 小僧、狸百匹、箸百ぜん、天目百ぱい、棒八
百本、武具、馬具、武具、馬具、三ぶぐばぐ、合せて武具馬具六武具馬具、
菊、栗、菊栗、三菊栗、合せて菊栗、六菊栗、麦ごみ麦ごみ、三麦ごみ、合せ
て麦ごみ 六麦ごみ、あのなげしの長なぎなたは、誰がなげしの長薙刀ぞ、
向こうのごまがらは、荏の胡麻がらか、真胡麻がらか、あれこそほんの 真胡麻が
ら、がらびいがらびい 風車、おきやがれごぼし、おきやがれご法師、ゆんべ
もごぼして又ごぼした、たあぶほほ、たあぶほほ、ちりから、ちりから、つつたつ
ぽ、たつぽたつぽ 一丁だこ、落ちたら煮てくを、煮ても焼いても喰われぬも
のは、五徳、鉄きゆう、かな熊どうじに、石熊、石持、虎熊、虎きす、
中にも、東寺の羅生門には 茨城童子がうで栗 五合つかんでおむ
しやる、かの頼光のひざ 元去らず、鮎、きんかん、椎茸、定めてごた
んな、そば切り、そうめん、うどんか、愚鈍な小新発知、小棚の、小下の、
小桶に、こ味噌が、こ有るぞ、こ杓子、こもつて、こすくつて、こよこせ、おっと、
がつてんだ、心得たんぼの、川崎、神奈川、保土ヶ谷、戸塚を、走って
行けば、やいとを摺りむく、三里ばかりか、藤沢、平塚、大磯がし
や、小磯の宿を七つおきして、早天そうそう、相州小田原とうち
んこう、隠れざらぬ貴賤群衆の、花のお江戸の花うみろう、あれあの花
を見て、お心を、おや はらぎやという、産子、這う子に至るまで、此のうら
ろこの「評判」、ご存知ないとは申されまいつぶり、角だせ、棒だせ、ほ
うぼうまゆに、うす、杵、すりばちばちばちぐわらぐわらぐわらと、羽目をは
ずして今日お出での何茂様に、あげねばならぬ、売らねばならぬと、
息せい引っぱり、東方世界の薬の元締、薬師如来も照覧 あれと、
ホホ 敬って、うみろうは、いらっしやりませぬか。